「ぐっ……！」
　巨大なブラックドラゴンが放った爆炎を、レンはかろうじて魔法障壁で防いだ。
　それでも、障壁を通して伝わってくる強烈な熱に、思わず呻き声が漏れる。
「レン、大丈夫！？」
　そんな片割れの身を案じて、双子の姉であるリンが声をかけた。
「平気だよ、戦いに集中して！」
　レンはそう言いながら、反撃の魔法弾を数発放つ。
　同時に横に飛んで、唸りを上げて迫ってくるドラゴンの尾を避けた。
「よぉし……！」
　リンはぐっと唇を結ぶと、精神を集中させて、大呪文の詠唱に取り掛かる。
　レンがドラゴンの注意を引き付けてくれている間に、自分が大技を準備して一気に仕留めるというのが、今回の作戦なのだ。
「エルロ・ファグレイ・ゼルロガリア・スセイミー 第二の元素たる水よ、汝が力を示せ。全てを焼き尽くす炎を消し去り、氷結の静寂をもたらし給え――」
「……グオオォッ！？」
　ブラックドラゴンはリンの詠唱に気付くと、はっとして彼女の方を振り向き、ブレスを放たんと口を大きく開けた。
　だが、それは遅すぎた。
「――《爆裂の雪崩（エクスプローシヴ・アヴァランチ）》！」
　呪文の完成と共に、ドラゴンの眼前から凄まじい冷気と氷雪の爆発が発生する。
　それはドラゴンの鱗を、口の中をずたずたに引き裂いていき、血が噴き出す暇も与えずにその傷口を凍て付かせて、この強大な生物に致命傷を与えた。
「グ……ガ、ァ……ッ！」
　ドラゴンは呻き声をあげて、その場に崩れ落ちる。
　それきり動くことはなかった。
「ふう……」
　リンは額の汗を拭うと、大きく息をついた。
　そして、まだ倒れ伏したまま動かないドラゴンから目を逸らすと、自分の片割れの方へと駆け寄った。
「お疲れ様、レン」
「そっちこそね」
　二人はお互いに顔を見合わせると、にっこりと微笑んだ。

　彼らはまだ幼さが残るほどの年齢だったが、双子の冒険者として、また将来有望な魔道士として、所属する冒険者の宿やその界隈では既に少しは名の知られた存在になっている。
　こうしてかなり強力なモンスターの討伐も依頼されるようになってきたのが、その証拠だ。
「さあ、早く帰って報告しよう」
「うん！」
　レンの言葉にリンが頷きを返し、二人はさっそく帰路につこうとした。
　その時。

「『――呪われよ』」

「……っ！？」
　二人がはっとして振り向くと、倒れ伏したブラックドラゴンが、怒りに燃えた目をこちらに向けていた。
「『呪われるがいい、我が命を断った者よ』」
　ドラゴンが、もう一度そう呟く。
「あっ……！」
　突然、リンの足元から蛇のような形をした黒い光が湧き上がって、彼女の体に絡みついた。
「リンっ！」
　レンが咄嗟に杖を構え、解呪の魔法を唱えようとする。
　リンも必死に精神を集中させて、抵抗しようとした。
　しかし、死に際に残る力と憎悪の限りを注ぎ込んだドラゴンの呪詛の前では無力だった。
「あ……、あぁあっ！」
「リン！！」
　なすすべもなく、地面に倒れて身悶える彼女の元へ、レンがあわてて駆け寄った。
　ドラゴンはそんな二人の様子を見つめながら、苦しい息の下から嘲るような声を漏らす。
「『小娘よ。お前は取るに足らぬ卑しき者でありながら、地上において最も高貴

な存在たる我を殺めた。その報いを受けるのだ。苦痛に満ちた死か、自ら卑しき存在へと身を堕とす破滅かによってな……』」
「やめろ、リンに何をしたんだ！？」
　苦しむ片割れを抱きかかえながら、レンが激昂してそう叫ぶ。
　ブラックドラゴンは、そんな彼を嘲笑った。
「『その小娘はいま、我が放った呪いの黒蛇に絡み取られ、体内から締め上げられておる。夜毎苦しみ、衰弱し、一年と持たずに死ぬであろう』」
「……っ！」
　それを聞いて、リンが苦しみながら顔をしかめ、レンは怒りに歯を食いしばった。
「『だが、それから逃れる術がある』」
　ブラックドラゴンはそう言って、目を細めた。
「『小娘よ。死を迎える前に、自らの意思で他の何者かの前にその身を投げ出し、その者の奴隷となることを誓約するがいい。相手がお前の主となることを受け入れるなら、死の呪いからは逃れるであろう。以降、身も心も永遠にその主の玩弄物に堕することと引き換えにしてな……』」
「ど、奴隷……」
「ふざけるなっ！　今すぐにリンを解放しろ、さもないと……！」
　リンが青ざめて苦しげに呻き、レンは激怒して、ドラゴンに杖を突きつける。
「『どうするというのだ？　我は間もなく息絶える。この期に及んで脅しなど無駄なことだ、愚か者よ』」
　ブラックドラゴンはそう嘲って、満足そうに口元を歪めた。
「『小僧、お前は傍にいて、何をすることもできずにただ眺めておるがよい。我を屠るほどの力を持つその小娘が苦しみ抜いて死んでゆく様か、あるいはその苦痛に耐えきれずに、自ら下郎の足元に身を投げ出して奴隷に堕ちる様かをな。それこそが、我の報復なのだ……』」
　最後にそう言うと、ドラゴンは静かに目を閉じて、今度こそ事切れたようだった。
「……リン」
　レンはしばらく黙り込んでから、腕の中のリンに呼びかけた。
　リンはいまだに苦しんでおり、全身にびっしょりと脂汗を浮かべている。
「リン、しっかりして。リン……」